

阿岐のまほろば

Vol. 29

弥生時代の木樋を発見!!

おうばん ごう い せき きいじょうちようした み
黄幡1号遺跡（西条町下見）



遺跡は、西条盆地の中央部に位置する陣が平山^{じんがひら}から北西に伸びる低丘陵の先端部に立地し、遺跡の北東側には谷筋が入り込んでいます。

平成14年度から、県道改良工事に先立ってこの遺跡の発掘調査を実施しており、これまでに弥生時代後期の竪穴住居跡や、中世から近世にかけての寺院跡を確認しています。

平成15年度は、5月から8月にかけて発掘調査を実施し、弥生時代の中期頃の水路跡や木製品、土器、石器などが見つかりました。

水路は、自然流路に多量に堆積した土砂を掘り込んで作られており、その一部に「木樋」が据えられています。出土した木樋は、丸太を割って中を刳^くり抜いて作られており、長さ約5m、幅約50cm、厚さ約5cmと大きなものです。木樋が据えられた地盤は軟弱な砂層なので、木樋自体の重みで沈んでしまわないように、下に3枚の板材（胴木）が敷かれていました。さらに、木樋を固定するために、内側から杭が打ち込まれています。

そのほか、木樋の周囲の軟弱な土壌を安定させ



遺跡位置図 (1:50,000)

るために、水路の兩岸に先を尖らせた杭をたくさん打ち込んだり、建物の部材と思われる板材を設けたりしています。また、木樋の付近からは、鋤・鍬の未製品などが出土しました。

このほか、木樋の近くに、同じ方向に倒れた杭列が見つかりました。周辺には樹皮や小枝などが残っていたことから、これらの杭は、土砂をせき止めるためのしがらみのように使用されていたことがうかがえます。

木樋は、南東の方向から、谷が開けている北西に向けて水を引いていたものと考えられます。今回の調査区域内に水田跡は確認されていませんが、木樋を設置した水路の存在からすると、水田に水を引いていたことも考えられます。

木樋が設置されていた堆積土中には、弥生時代の前期末から中期中頃にかけての土器が大量に含まれていました。そのため、木樋を伴う水路は弥生時代中期中頃に機能していたと思われます。

出土した土器は、大形品が少なく、ほとんどの土器は摩滅していません。なかには煮炊きによってススが付着した甕などもあることから、日常的に使用していたものを破棄したことが考えられます。また、遺物のなかにはミニチュア土器や分銅形土製品など、祭祀に関わると考えられるものも見つかっています。これらのことから、付近に集落があり水田を営んでいたのではないのでしょうか。



調査区全景



出土した鍬先



出土した鋤先

今回の調査では、西条盆地における弥生時代中期中頃の集落や水田のあり方を考えるうえで多くの成果があり、注目される遺跡といえます。

(鍛冶・長友)

ねんどかく 粘土槨の古墳 見つかる！

じゃのきここ ふんぐん し わちようひがし わ
蛇迫古墳群（志和町東志和）

平成15年4月から9月にかけて、志和町志和東の蛇迫古墳群の発掘調査を実施しました。

古墳群は、標高550mの弁財天山から北へ延びる尾根上に位置します。平野からの比高は約30～40mで、東西北の三方が見渡せるたいへん眺望のよい立地です。4基の円墳（北から順番に第1～4号古墳）が並んで造られており、各古墳の墳丘は直径10～12mと小規模です。

本古墳群の埋葬施設にはいろいろなものがあり、最も簡単なものは土を掘り込んだ土槨です。木棺もありますが、木棺は腐って残らないため、掘り方と棺の痕跡が確認されます。また、石材を組み合わせた石棺もあります。本古墳群では、このほかに県内では珍しい粘土槨という埋葬施設がみつかりました。粘土槨とは土壌内に粘土を敷き、そのうえに木棺を置き、棺全体を粘土で覆ったものです。他の遺構と同様に、木棺は腐って残っていませんが、粘土の遺存状態によって、棺の形や大

きさなどを知ることができます。

第1号古墳には、主軸を東西に向けた3基の埋葬施設があり、遺体はいずれも頭を東に向けて埋葬されていたと考えられます。中央には粘土槨が、その北と南に接するように箱式石棺が造られていますが、切り合い関係などから中央の粘土槨がまず造られ、次に北側の石棺、さらに南側の石棺が造られたと考えられます。なお、粘土槨の東端からは刀子が1点出土しましたが、2基の石棺からは副葬品は出土しませんでした。

第2号古墳には、主軸を東西に向けた粘土槨が1基あります。第1号古墳の埋葬施設と同様に、被葬者は頭を東に向けて葬られたと考えられます。また、粘土槨内の東の端からは鉋・刀子などが出土したことから、これらの遺物は、被葬者の頭の近くに副葬されたことがわかります。

第3号古墳からは、2基の土槨がみつかりました。北側の土槨には小口に板を設置した痕跡が残





第1号古墳の埋葬施設

っており、木棺を納めていたと考えられます。南側の土壌の木棺痕跡は不明でした。なお、2基の埋葬施設ともに副葬品はみつかりません。

第4号古墳は調査範囲が限られていたこともあって、埋葬施設はみつかりませんでした。おそらく調査範囲外にあると思われます。

4基の古墳は同一丘陵上に位置することから、時間的に続けて造られたと考えられます。立地からすると、眺望がよく高所に位置する第4号古墳がまず造られ、その後、順に第3・2・1号古墳が造られた可能性も考えられますが、遺物の出土が少ないため、さらに検討が必要です。

本古墳群の埋葬施設は、古墳時代前・中期の特徴を示しています。副葬品が少ないため、詳しい時期はわかりませんが、第1号古墳の墳丘裾から出土した土師器はじき こがたまるやこつぼ小型丸底壺が4世紀後半から5世紀前半頃の時期と考えられるので、その頃に造られたものと推定されます。



第1号古墳 粘土槨（中央）



第2号古墳 粘土槨



第2号古墳 鉄器出土状況

志和地域の古墳はこれまでに、横穴式石室をもつ古墳時代後期のものが調査されています。しかし、前・中期の古墳は調査が行われていないため、実態はよくわかっていませんでした。今回の調査では志和地域の前・中期古墳の特徴の一端が明らかになりました。粘土槨と石棺を同時にもつ小規模古墳は、県内では珍しい例といえます。しかし、本古墳群はどのようにして形成されたのか、第1号古墳では粘土槨と石棺を設けていますが、その埋葬方法の採用の違いにはどんな意味があるのかなど、今後の検討課題がたくさんあります。（唐津）

（財）東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 29

発行日 2004(平成16)年2月27日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター
発行 東広島市西条町大字馬木541-1
TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1-5